

(様式第4号)

上田市美術館協議会 会議概要

1 審議会名	上田市美術館協議会
2 日時	令和3年3月12日 午前9時30分から午前11時30分まで
3 会場	上田市立美術館市民アトリエ・ギャラリー
4 出席者	小林幸雄会長、佐藤聡史委員、武田敦子委員、土屋健治委員、伴美佐子委員、松本委員、米津福一委員（五十音順）
5 市側出席者	荻原総合プロデューサー、清水館長、山寄館長補佐、小笠原館長補佐、岡田主査、松井主査、清水主任、青木主任、山極主事、吉川美術教育指導員
6 公開・非公開	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 ・ <input type="checkbox"/> 一部公開 ・ <input type="checkbox"/> 非公開
7 傍聴者	1人 記者 0人
8 会議概要作成年月日	令和3年3月12日

協 議 事 項 等

1 開会(会長)

2 協議事項

・資料に沿い事務局から概要を説明

(1) 上田市立美術館の運営方針について

(委員) サントミュージゼ(上田市立美術館・上田市交流文化芸術センター)が果たす役割のイメージ図について、基本理念と目的の位置を逆にした方がわかりやすいのではないかと。

(事務局) 既存のイメージ図にとらわれることなく、変更も視野に検討したい。

(委員) 教育普及事業(子どもアトリエ)の事業イメージのうち、「市内児童生徒の受入事業」の文言の頭に「園児」を入れた方がいいのではないかと。

(事務局) この「児童」の中には、「園児」を含めて表現している。

(委員) 新学習指導要領では、急激に変化する時代に求められる資質や能力を「主体的・対話的で深い学び」により習得することが明記されているが、教育現場の先生は、どれくらいの感度を持って対応しているのか。個人的には学校によって取り組みに差があるように思う。

(委員) 先生たちの中には「主体的・対話的」な授業をする意識はある。美術館から学校へのアプローチや学校のニーズに応じたプログラムの開発など、学校との双方向的な連携を深めるためには、美術教員が突破口になって取り組んでいかなければならない。上小美術教育研究会は、同好会であるがゆえにまだまだ意識が低い面があるが、美術館と学校の連携を深められるように対応していきたい。

(委員) 安曇野市の美術館・博物館では、スクールプログラムの一環として学校に出向き「学校ミュージアム」を行っている。他の市内美術館でも独自プログラムを持っているが、学校ごとに偏りが出してしまうという理由で行うことができない状況がある。上田市立美術館では、プログラムを実施できる学校から順次実施しており、偏りにとらわれることなく進めてほしい。

(委員) 「学校との双方向的な連携を探る」という文言について、まだ発展途上である印象を受けた。小学校の図工の授業は、5分間の休み時間だと図工室への教室移動が間に合わないため、各教室で行っていることが多い。図工だけに時間を割くことが難しいので、美術館からアプローチしてもらったり、上小美術教育研究会から各学校に指導していきたい。

(事務局) 美術館連携事業では、子どもアトリエで制作しているWEBコンテンツを見て関心を持った東

小学校の先生からスクールプログラムの提供依頼を受けたり、丸山晚霞記念館と連携し、北御牧小学校や東塩田小学校等にアウトリーチを行った。最近では、丸子北小学校が郷土学習の一環で、農民美術の作品を直接見て学習する機会を設けた。現物を見ることで子どもたちの中に強く印象に残ったようだった。美術館は、美術に限らず郷土史を学ぶ機会を設けることで、知識定着に役立っていると思う。こういう事業を各学校や上小美術教育研究会と連携して行っていきたい。来年度は、武蔵野美術大学より講師を招いて、対話型鑑賞プログラムの研修に関心がある公民館や学校と受けたいと考えている。また、未確定だが、企業からの寄付金を用いて、アーティストが小中高生を対象に出前授業を行う事業を考えている。

(委員) 美術館は一般的に絵画や彫刻を鑑賞しに来るところと思われがちだが、郷土史や社会科を学ぶことができる場所でもある。海外の美術館や博物館では学芸員が小中学生と一緒に郷土史を学習しているケースがある。山本鼎は郷土史を学ぶ題材として適しているし、シンビズム 4 では、小山利枝子氏の作品から図工や理科について学ぶことができ、戸谷成雄氏や母袋俊也氏の作品は理科や地理等に広げることでもでき、学校の先生にとって扱いやすい題材である。上田市立美術館は山本鼎、石井鶴三、ハリー・K・シゲタの作品を収蔵している美術館というイメージで留まっており、育成に力を入れていることがあまり知られていないと思う。育成について県内外に周知することで、他館と連携できる。

(事務局) 教育現場に美術館の活用方法があまり知られていないのが現状である。教育委員会の学校教育課に働きかけてもなかなか進展しない。定期的に校長会や教頭会に上小美術教育研究会と一緒に働きかけていきたい。

(委員) 教員の中には美術館の活用方法を知らない人がいるので、例えば WEB コンテンツに指導案が付いていると扱いやすい。美術館の利用をコーディネートすることに難しさを感じているため、学校現場と協力して進めてほしい。

(委員) この春から市内の小学生に 1 人 1 台タブレット端末が配布された。端末があればすぐに WEB コンテンツにアクセスできるので、美術館にアプローチしやすくなると思う。また、実体験をすることも大切だが、今年小学 6 年生がオルゴールの木箱に彫刻をする授業を見たとき、みんな鎌倉彫を彫っていた。この地域の農民美術の知識があったら、その知識を取り入れて授業ができると思うので、今あるコンテンツをブラッシュアップできればいいと思う。昨年、長野県信濃美術館でアート・コミュニケータの養成講座を受講した。アート・コミュニケータは、美術館と美術館を知らない人たちの橋渡しをすることを目的として活動していく予定である。上田市立美術館にアート・コミュニケータを導入することを勧めるわけではないが、この美術館の学芸員が外部の方とより繋がりを持つことによって、美術館の敷居が下がるといい。

(委員) アート・コミュニケータは、ボランティアなので、各自の自由な考えに基づいて活動してほしいと思っている。美術館の活用方法についてさまざまな考えがあるので、利用者と学芸員の間を橋渡ししてもらえ存在となってほしいと考えている。

(委員) 全国新聞協会は、NIE (Newspaper In Education) の活動を行っている。この事業は、新学習指導要領に明記されており、出前授業を行っている。参加する学校が徐々に増えており、地道に活動している。市教育委員会や県教育委員会などの構造的な問題や教員の定期的な人事異動があるが、他地域の美術館と理念や課題は共通する部分があるので、県内の公設美術館と連携して活動することで、学校や市民に美術館の活動が浸透すると考えている。

(2) 令和3年度事業計画について

(委員) 小学生にタブレット端末が配付されているので、タブレットで絵を描くこともいいと思う。

(委員) オンライン活用は、武蔵野美術大学の三澤教授が詳しいので、聞いてみてはどうか。

(3) その他

(事務局) 今回の意見をもとに基本方針を検討し、変更がある場合は書面審査をお願いする予定である。
来年度の協議会は7～8月を予定している。

3 閉会(会長)